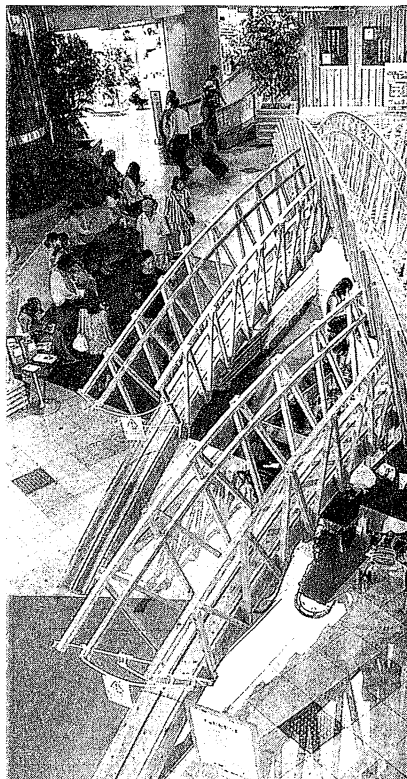


色鮮やかな装飾が目を引く

でも、ためめの装飾は、メンバーが自宅で折り紙を折るなどし、季節を感じさせる装飾を施した。また、周囲は花壇となっており、東電ハミングワークに依頼し、掲示板の直下だけ花の色を変えて目立たせる工夫も凝らした。7月以降、道行く人々が立ち止まって掲示板を眺める姿が少しずつ見られるようになった。

苦境下でも

すよ、社員らはそれぞれの立場で顧客とのコミュニケーションに努めている。寺島支店長は今回の活動について、「社員が一步踏み出して、情報発信をしようという発的に動いてくれたことがうれしかった」と指摘。「今後は、お客さまへの感謝の気持ちも掲示板で伝えていければ」と話していた。



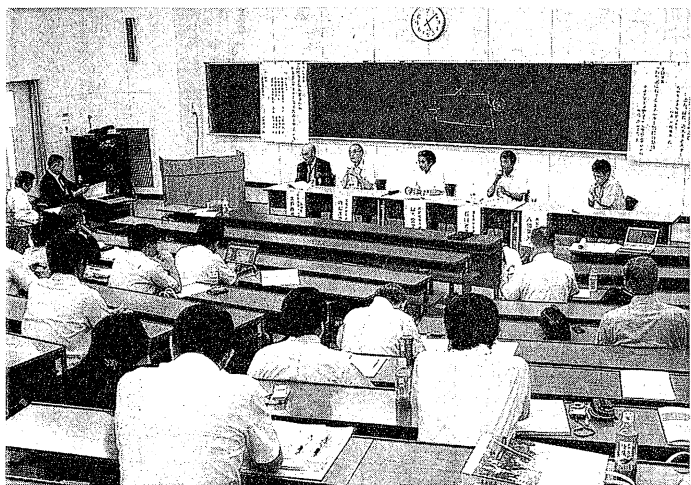
震災後の取り組み探る

日本エネルギー環境教育学会(会長 熊野善介・静岡大学創造科学技術大学院・教育学部教授)の第8回全国大会が17、19日の3日間、松江市の島根大学で開かれた。今回は「古代の先端産産地から未来のエネルギー環境教育を考えよう」

エネルギー環境教育学会

がテーマ。小中高の教諭や大学関係者らが70件以上の実践活動などを報告した。このほか、講演やパネル討論会、シンポジウム、見学会も実施。東日本震災以降の環境・エネルギー教育のあり方について、示唆に富む内容となった。

島根大で第8回全国大会



将来のエネルギー教育などについて、活発に議論が交わされたパネル討論会

特別講演は「エネルギー環境と教育を考えるー過去、現在、近未来と未来ー」と題し、吉野勝美・大阪大学名誉教授・島根県産産技術センター所長が登壇。自身が生まれ育った島根の自然と親しんだ体験や、色素増感太陽電池開発といった島根県産産技術センターの取り組みなどを紹介した。

適切な知識提供 筑波大学の内山洋司・システム情報系教授は、「わが国におけるエネルギー問題の動向」をテーマに基調講演を行った。

発電そのものの学習大切

持ち、育成に取り組み必須性を訴えた。石川教諭は教育現場の立場から発電に関する学習の重要性を指摘し、カリキュラムの充実を目指すことなどを訴えた。原重幸邦教授は「3・11は子力に対しては、原子力の可否のために教育するのではなく、発電そのものを学習するのが大事」と強調した。吉野センター所長は「子どもたちの関心を育むためにも、先生自身が理系のことに関心を持つ必要がある」と指摘。内山教授は、物事のライフサイクルを意識する視点が必要だと指摘。内山教授は、物事のライフサイクルを意識する視点が必要だと指摘。内山教授は、物事のライフサイクルを意識する視点が必要だと指摘。

電力・地域